ある公立中学校の2年生が持つスクールカウンセラーへのニーズ 開かれた相談室運営である「自由来室活動」と関連して

茨城県スクールカウンセラー 半田 一郎

スクールカウンセラー（以下SCと記す）の配置校の中学生がSCに対してどのようなニーズを持つのかを調査することを目的とした。SCの必要性についての質問紙を160名の中学2年生に実施した。対象となったSCは、相談室を開放して自由来室活動を行い、多くの生徒と日常的な関わりを持っていた。77%の生徒がSCが学校に必要だと回答した。SCは、幅広く生徒のニーズに応える理想的なSCではなかったが、生徒の肯定的な評価が得られたと言える。

キーワード：スクールカウンセラー，中学校，ニーズ

問題と目的

平成7年度より文部省によるスクールカウンセラー活用調査研究委託事業が始まり、平成12年度末で調査研究の期間を終えた。配置されたSCの多くに、財団法人日本臨床心理士資格認定協会認定の臨床心理士が充てられており、「学校臨床心理士」とも呼称されている。そして、徐々に全中学校に配置される計画である。そして、その事業に呼応するように、いくつかの地方自治体も県や市町村レベルで独自にSCを学校へ配置する事業を行ってきた。

一方、SCに対して生徒がどのようなニーズを抱いているかについては、学校心理学に基づく調査結果が挙げられる（石隈，1999）。しかしこの調査対象はSCが未配置の学校の生徒であった。そして、その結果は「理想的なスクールカウンセラー」であると意味づけられている。その上で、この理想像と「スクールカウンセラーの現実像」を統合していくことが、今後の課題であるとしている。また、玉瀬（2003）では、「子どもたちの実態とニーズについては、つねに新しい資料を蓄積していくことが必要である」と述べられている。

学校心理学では、全ての生徒を援助の対象と捉え、さまざまな援助を3段階の援助サービスに分けて考えている。そして、スクールカウンセラーも全ての援助サービスの担い手として位置づけられる（石隈，1999）。

そして、期待される活動内容も、活動の対象も多岐にわたっている。しかし現実には、SCはほとんどの場合非常勤であり時間の制約は大きい。そのため、期待される活動すべてを均等に行うことは非常に難しい。従って、各学校の実情やSCの持ち味に応じて、SCの活動内容は異なってくる。それだけではなく、事業の主体の違いにより、SCの活動の実際はかなりのバリエーションを持つと考えられる。

以上のことから、現実のSCと関わりのある生徒がどのようにSCに対してニーズを抱いているかを明らかにすることが必要であると言える。また、子どもがSCに対して持っているニーズを一括りに捉えるのではなく、各実践の実際との関連の中でSCへのニーズを捉える必要がある。つまり、事例的にSCへのニーズを検討し、データとして蓄積していく必要があると言える。

一方、SCの活動の1つとして、開かれた相談室運営を行い、学校という子どもの日常生活の中で心理的な援助を行おうという方向性がある。半田（1996，2000）では、休み時間等に生徒が相談室を自由に訪れ自由に過ごす活動を「自由来室活動」と名付け、そこでのSCのかかわりが、援助的な効果を持っていることを明らかにしている。また、木南（1998）や高岡（2002）においても同様の実践が報告されている。

学校現場では、悩みや問題に直面した子どもは、悩みや問題を語る相談という形で援助を求めるとは限ら

ない。問題を抱えてはいるが、相談として語ることでできない子どもも多い。高岡(2002)でも指摘されているように、クライアントが言語的コミュニケーションを通して悩みを訴えるという伝統的なカウンセリングの前提は、学校では成り立ちにくい。これらのことから、相談としては現れてこない問題にも広く援助的に関わっていくことが学校現場では求められているといえる。そして、そのための1つの方法論として、自由来室活動の有効性が期待できる。自由来室活動では、生徒が必ずしも明確な問題意識を持たない場合でも、おしゃべりや雑談という形で、SCは生徒と関わりを持つことができる。そのおしゃべりや雑談の中で、SCが援助サービスを提供していくことができる(半田, 2000)。

また、自由来室活動では、個別カウンセリングの繰り返しよりも多くの様々な生徒に関わることが可能である。つまり、ごく一部の生徒に対する援助サービスではなく、多くの生徒に対する援助サービスの場として機能しうると言える。全ての生徒を援助サービスの対象として考える学校心理学的な視点と一致しており、SCが学校心理学的視点に立って生徒への援助サービスを実践していく際の基盤となる活動の1つであると考えられる。

しかし、このような活動に対しては、相談室が生徒のたまり場になってしまい相談活動の妨げになるのではないかという懸念を教職員が持つことが多い。例えば、木南(1998)では、相談室が生徒のたまり場になり「本当に相談を必要としている弱い生徒が入って来にくくなるのではないのでしょうか」との指摘が学校側よりなされている。さらに、高岡(2002)においても、相談室に生徒がたむろすることを非行の温床になりかねないと捉える学校と、大人からの援助を期待する兆しと捉えるSCとの間に、大きな開きがあると指摘されている。

つまり、SCの側からは、自由来室活動が援助的な機能を持っていると考えられているが、教職員の側からはその機能に懸念がもたれていると言える。しかし、実際に利用している多くの子どもが、SCに対してどのようなニーズを持っているかは明らかになっていない。

そこで、本研究では自由来室活動を行い生徒と多くのかかわりを持つSCに対するニーズについて、SCが

配置されている中学校の生徒を対象に質問紙調査を行い、学校心理学的視点から次の4点を明らかにすることを目的とした。生徒の悩みやSCへのニーズの実態、SCとのかかわりの程度、自由来室活動への来室と生徒の悩みの体験の関連、自由来室活動への来室とSCへのニーズの強さの関連、である。

方法

1. 実践の概要

A 中学校の概要

関東地方の地方小都市にある、普通学級15学級、特殊学級1学級、生徒数600名弱の中規模校であった。10数年前に新興住宅地に設立された学校で、保護者には東京都内への通勤者も多かった。また、その出身地も全国にまたがっていた。

A 中学校での実践の概要

SCは、1998年5月より文部省の活用調査研究委託事業によって約2年間活動した。初年度は、週1日8時間で勤務した。2年目は、週に2日4時間ずつ、1日は午前、1日は午後という体制で勤務した。

相談室は、校舎1階の1・2年生の昇降口近く、保健室の斜め向かいに設置された。もともと相談室として作られていた部屋で、普通教室の3分の1ほどの広さであった。また、2年目には、校舎の3階の2年生の教室の並びに1教室分の部屋を自由来室活動の場として開設した。一方、職員室にもSC専用の机が設けられ、SCは面接の合間等にはその机についていることが多かった。

SCの活動は、初年度には、学校との話し合いに基づき、不登校生徒への援助に重点を置くこととなった。その際には、SCが直接に生徒に関わるのではなく、原則として担任や養護教諭とのコンサルテーションを中心とすることが確認された。また、保護者からの相談の申し込みには、担任、養護教諭、学年主任、教頭、その他の関連する教職員を通し受け付けることとした。不登校生徒の保護者には、機会を見て担任や養護教諭が働きかけ、来談を促してみることが確認された。

生徒とのかかわり

(1) 生徒との面接相談

学校との話し合いに基づき、生徒へのカウンセリングをSCの主要な活動とはしない方針であった。その

ため、生徒に対して来談を促すような広報・宣伝活動は行わなかった。にもかかわらず、生徒から担任を通して自主的な相談の申し込みが数件あった。また、教職員が必要を感じ、SCに生徒のカウンセリングを依頼してきたケースも数件あった。こういった申し込みには、予約制で時間をとって面接を行った。生徒との面接相談によるカウンセリングは初年度には延べ16件、2年目には延べ15件であった。

(2) 自由来室活動

2年目の開始時に、担当教職員と1年間の活動を振り返り、今後の方針について話し合った。その際に、より多くの生徒にSCが直接関わることが学校側からの要望として出された。このことから、SCは、1年目の活動を教職員がある程度高く評価し、SCを受け入れてくれたように感じた。そこで、相談室とは別の空き教室を利用して、自由来室活動を行うこととなった。活動の開始は、準備期間を置いて、2年目の6月からとした。開設時間は、SCの勤務している日の、2時間目の休み時間（15分間）と昼休み（20分間）とした。

SCのいない時間帯や曜日には、部屋には鍵をかけ、開放しなかった。また、学校行事の都合で時間割が変更になり、昼休みに掃除が充てられた場合には、開放しなかった。そのため、実際には週に1～3回程度、計54回の開設であった。

部屋の中には、ソファセットとテーブル・折り畳みのパイプイスを設置した。また、画用紙などの紙類、マジックやクレヨン、色鉛筆などの筆記用具を用意し自由に使えるようにしておいた。生徒が、描いたイラストや詩などの作品は、生徒の要望や許可に基づいて、部屋の中の壁に掲示した。

生徒には、「特に相談がなくても、おしゃべりや息抜きに来てください」と「便り」を通して知らせた。開設時間中には生徒は自由に部屋を訪れることができた。当初、来室した生徒はノートに自分で記名するように求めた。しかし、記名しない生徒の方が多く、また、記名した場合でも、名前や学年、クラス、性別を正しく記入するとは限らなかった。そのため、SCが管理することは難しく記名は求めないことにした。こういった事情があり、来室者の実数は不明であるが、少ないときで5名、多いときで20数名が来室した。来室者はほとんどが2年生で、1年生の来室はなく、3

年生は2人の生徒が3回来室しただけであった。部屋では、生徒たちは、思い思いに生徒同士でおしゃべりをしたり、イラストを描いたりして過ごしていた。生徒からSCに「聞いて」などと悩みを語ることはあったが、時間を設定して改めて相談したいという要望はなかった。

SCは、生徒の雑談や愚痴には共感的に傾聴につとめた。生徒から語られた悩みや問題は、一次的・二次的な問題に該当するものであり、三次的な問題に該当する内容はなかった。

学習面に関しては、生徒から勉強が分からないなどの話題が語られることが多かった。SCは、教科の具体的な内容に深入りすることはせず、勉強の大変さなどの生徒の気持ちに共感するような対応に努めた。これには、教科の具体的な内容は教師の専門領域であるため、SCが学習や勉強の具体的な中身に立ち入ることは、教師の否定的な反応を引き起こす可能性があるという懸念がSCにあったためである。

心理・社会面に関しては、生徒のおしゃべりの中で、友達とのかかわりはよく出てくるテーマであった。SCは、おしゃべりの中でも、何らかの援助的なかかわりができないかと工夫を重ねていた。例えば、生徒の感情や認知に触れていけるように、SCは応答を工夫して関わるようにしていた。生徒は、おしゃべりの中でも、SCからの言葉を受けて、少し考え込んだり、自分自身を振り返ったりする様子が見られた。また、ちょっとした生徒同士のトラブルが起きたときには、SCは行為そのものを止めさせるのではなく、行為の背景にある生徒の気持ち・感情にフィードバックを試みることもあった。心理・社会面のかかわりは、SCの側からみればある程度は効果的なかかわりができたのではないかと考えられる。

進路面に関しては、具体的な進路先に関する悩みや問題は語られることはなかったが、「高校へ行けるのかなあ」といった漠然とした不安が語られることが多かった。これは、来室者のほとんどが2年生であったためだと考えられる。一般に、生徒は保護者や担任教師などの関係者と話し合いを重ねながら、進路選択を進めていくこととなる。反対に、SCは進路に関する具体的な情報はほとんど持っていなかった。そのため、進路面の悩みには、生徒が担任教師や保護者からどのように言われているかをたずね、そしてそれをどのよ

うに感じているか、といったことを基に話を進めていくことが多かった。つまり、SCは進路選択の問題には直接関わらず、保護者や教職員の生徒へのかかわりを側面からサポートするようにかかわっていた。こういった関わりは「整理する働きかけ」(半田, 2004)と共通する方法である。

以上のような生徒へのSCのかかわりは、半田(2000)と同様に行われたと言える。

(3) スクールカウンセラーだより

生徒向けに、心の健康や自己理解に関するトピックを掲載した「たより」をSCが独自に作成して発行した。発行は初年度には6回、2年目は4回であった。

「たより」は教職員から(自分自身が)勉強になる」などと高く評価されることが多かった。また、生徒にも好評のようで、生徒同士が便りの内容を話題にしていたという報告を担任から受けたこともある。

2. 調査対象

A中学校の2年生を調査対象とした。この学年の生徒は、活用調査研究としてSCが配置された最初の年度の新入生であった。また、自由来室活動のために設けられた部屋も、2年生の教室と同じ階にあり、この学年はSCとの接触が最も多い学年であった。最も長い期間、最も高い頻度でSCと接触していた学年であった。こういった点から、現実のSCに対するニーズを調査するには最も適当な学年であると考えられ、調査対象として選択した。

2年生全員にアンケートを実施し、170名の回答を得た。そのうち記入漏れのない、160名(男子84名、女子76名)を分析の対象とした。

3. 手続き

調査方法は、学級担任が質問紙を学級活動の時間に配布し、その時間内で記入し回収するという形式で行われた。また、調査は無記名で行われた。調査時期は、SCが配置されてから1年10ヶ月が経過した2000年の3月中旬、活用調査研究の終了間際であった。

4. 調査内容

調査内容は以下の通りであった。(1) スクールカウンセラーとのかかわりを聞く項目。「SCを知っているかどうか」について聞く項目。「顔を知っているか」、

「名前を知っているか」、の2項目であった。(2) 自由来室活動の場を利用した回数について聞く項目。「なし」、「1回だけ」、「2~5回」、「6~9回」、「10回以上」の5段階評定であった。(3) 中学生が直面しうる問題28項目について、思い悩んだ経験の程度を聞く項目。学校心理学的視点から、「学習」、「心理・社会」、「進路」の3領域、そして、ニーズの程度により「一次的ニーズ」から「三次的ニーズ」の3段階に分類されている項目であった(石隈, 1999)。「よくある」から「まったくない」までの4段階評定であった。(4) 「(3)」で評定させた同じ項目について、相談相手としてスクールカウンセラーが必要かどうかを聞く項目。「とても必要だと思う」から「全く必要だと思わない」の5段階評定であった。(5) 最後に「自分の学校に生徒の相談相手としてスクールカウンセラーが必要か」を聞いた。「とても必要だと思う」から「まったく必要だと思わない」までの5段階評定であった。なお、「(3)」の悩んだ経験を聞く項目と「(4)」のSCの必要性を聞く項目、「(5)」の学校にSCが必要かどうかを聞く項目は、石隈(1999)と同じものを用いた。また、分析の際には、程度・頻度の低いものから「1, 2, 3, 4, 5」と数値化した。

結果と考察

1. SCとのかかわり

SCを知っているかどうかでは、約4分の3の生徒が、SCの顔と名前を知っていると回答した(表1)。また、自由来室活動の場を訪れた回数では、約6割の生徒が2回以上来室したことがあると回答した(表2)。これらから、SCの存在自体は概ね認知されており、さらに、自由来室活動も多くの生徒にとって利用可能な資源となっていると考えられる。

表1 スクールカウンセラーを知っているかどうか

	人数	%
顔も名前も知らない	10	6.3
顔は知っているが名前は知らない	7	4.4
顔は知らないが名前は知っている	27	16.9
顔も名前も知っている	116	72.5
合計	160	100.0

表2 自由来室活動の場を利用した回数

	人数	%
1度も訪れたことがない	51	31.9
1回だけ	17	10.6
2～5回	46	28.8
6～9回	20	12.5
10回以上	26	16.3
合計	160	100.0

2. 悩んだ経験

悩んだ経験についての結果は、表3の通りであった。悩んだ経験について「よくある」または「ときどきある」と答えた生徒の割合は、11～82%と項目によってばらつきがあった。上位4項目は70%を超え、「もっと成績を伸ばしたい」、「意欲がわかず勉強する気になれない」などの、学習面の項目であった。

石隈(1999)の結果との比較では、10%以上の違いが見られた項目は、28項目中2項目のみであった。調査対象となった中学生の悩みの実態としては、石隈(1999)と大差ないと言える。

3. SCの必要性

SCの必要性について、「とても必要」または「少し必要」と答えたものの割合は、表4の通りであった。「とても必要」または「少し必要」と答えた生徒の割合は、25～78%と項目によってばらつきが見られた。上位4項目は70%を超え、「学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりする」、「友だちとのつき合いをうまくやれるようにしたい」などの、心理・社会面の項目であった。石隈(1999)の結果との比較では、全28項目中16項目において、割合に10%以上違いが見られた。特に、心理・社会面の項目では、11項目中10項目において、割合が10%以上高くなった。また、学習面では3項目、進路面では2項目において、10%以上低くなった。

また、「学校にSCが必要かどうか」を尋ねた項目では、表5のように、「とても必要」「少し必要」をあわせて77%もの生徒が、SCを必要だと答えた。石隈(1999)では、同じ質問に対して、必要だと答えた生徒が51%であったのに比べ非常に高い値となった。

これらの結果から、A中学校の中学2年生では多く

の生徒が相談相手としてのSCを必要だと考えていると言える。そして特に心理・社会面の問題に対してSCの必要性を強く感じていると言える。

石隈(1999)では、「中学生は、学習面、心理・社会面、進路面で総合的に援助できる「スクールカウンセラー」を求めている」と述べられている。実践の概要で既に述べたように、本実践事例のSCは、必ずしも、石隈(1999)で示された総合的に援助できる「理想的なスクールカウンセラー」ではなかった。しかし、SCの必要性は非常に高く評価された。このことから、「理想的なスクールカウンセラー」ではなくても、学校の実情やSCの持ち味に応じて無理なく活動するスクールカウンセラーも、生徒からある程度は評価される可能性があると言える。そして、当然ではあるが、スクールカウンセラーが1人では応えきれないニーズには、援助サービスのコーディネーションによって学校全体として応えていく必要があるだろう。

また、SCの未配置校での調査結果(石隈, 1999)との比較から、理想的なSCに対しては生徒は幅広く必要性を感じていたが、日常的な関わりのある現実のSCに対しては特に心理・社会面の必要性を強く感じているといえる。一方、悩みの実態としては、石隈(1999)と大差ない結果であったのに対して、SCの必要性には違いが見られた。そして、自由来室活動の実践の中で、SCは心理・社会面の話題には積極的に関わっていくことができたという特徴があった。これらのことを考え合わせると、生徒は、自分の抱える悩みの大きさや強さからSCの必要性を判断しているのではなく、実際のSCとの接触するなかで、SCの必要性を判断していることが示唆される。

4. 内的整合性の検討

悩んだ体験について尋ねた項目とSCの必要性について尋ねた項目それぞれを、石隈(1999)に基づき、学習、心理・社会、進路の3領域に分類した場合と、ニーズの程度に応じて、一次的、二次的、三次的の3段階に分類した場合のアルファ係数を算出した。結果は、表6, 7のとおりであった。最も低い値が0.664となり、内的整合性があると判断した。これに基づき、各領域ごとに項目の得点を合計し、項目数で割ったものを、以下の分析に用いることとした。

表3 各項目ごとの悩んだ経験があると答えた者の割合(%)

	ニーズ の程度	本研究	差*	石隈 (1999)
学習面				
1. もっと成績を伸ばしたい	一次	82		84
2. 自分にあった勉強方法を知りたい	一次	70		69
3. 不安やなやみごとがあるために勉強できない	二次	42		35
4. 意欲がわかず, 勉強する気になれない	二次	79		74
5. 部活動と勉強をうまく両立させる方法を知りたい	一次	43		36
6. 勉強や成績のことで親の期待が重荷	二次	32		40
7. 教科の先生の接し方や教え方に不満がある	二次	70	>	57
8. 授業の内容が分からなくてついていけない	三次	51		55
9. 身体や健康に不安があって授業に参加するのが苦痛	三次	19		21
心理・社会面				
10. 自分の性格や自分の身体の変化などを知りたい	一次	22		30
11. 友達とのつき合いをうまくやれるようにしたい	一次	51		55
12. 自分の性格や容姿のことで気になることがある	二次	40		45
13. なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれる	三次	44		38
14. 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり, 友だちがいない	二次	29		24
15. 自分の性や異性との交際のことで悩みがある	二次	24		35
16. 学校あるいは学級になじめない	二次	16		17
17. 委員会活動や部活動で悩みがある	二次	11		15
18. 学校に行くのがつらくなったり, 行きたくなったりする	三次	35		33
19. 担任や部活動の先生に対して不満がある	二次	52		47
20. 自分の家庭のことで心配や悩みがある	二次	23		22
進路面				
21. 自分の能力, 長所, 適正を知りたい	一次	40		50
22. 将来の自分の職業, 自分の生き方, 進路に助言が欲しい	一次	58		56
23. 自分の進学や就職先の選択についてもっと情報が欲しい	一次	59		59
24. 進学や就職のための勉強や準備にやる気が起きない	二次	61	>	47
25. 進路選択において, 自分の希望が親や先生の意見と一致しない	二次	26		23
26. 友人関係を気にして, どんな進路にするか考えてしまう	三次	25		23
27. 多くの欠席, 校則違反などをしたことで進路について不安がある	三次	16		13
28. 自分の内申書にどんな内容のことが書かれているか気になる	二次	60		52

* 割合に10%以上差がある場合に不等号記号を記入した

表4 各項目ごとのSCが必要と答えた者の割合(%)

	ニーズ の程度	本研究	差*	石隈 (1999)
学習面				
1. もっと成績を伸ばしたい	一次	25	<	57
2. 自分にあった勉強方法を知りたい	一次	38	<	62
3. 不安やなやみごとがあるために勉強できない	二次	61	>	51
4. 意欲がわかず, 勉強する気になれない	二次	48		45
5. 部活動と勉強をうまく両立させる方法を知りたい	一次	41		41
6. 勉強や成績のことで親の期待が重荷	二次	53		44
7. 教科の先生の接し方や教え方に不満がある	二次	56		48
8. 授業の内容が分からなくてついていけない	三次	38	<	55
9. 身体や健康に不安があって授業に参加するのが苦痛	三次	43		35
心理・社会面				
10. 自分の性格や自分の身体の変化などを知りたい	一次	39		35
11. 友達とのつき合いをうまくやれるようにしたい	一次	75	>	55
12. 自分の性格や容姿のことで気になることがある	二次	46	>	35
13. なぜかひどく落ち込んだり逃げ出したい気分におそわれる	三次	73	>	54
14. 友だちとのつき合いがうまくいかなかったり, 友だちがいない	二次	74	>	61
15. 自分の性や異性との交際のことで悩みがある	二次	45	>	31
16. 学校あるいは学級になじめない	二次	69	>	54
17. 委員会活動や部活動で悩みがある	二次	44	>	34
18. 学校に行くのがつらくなったり, 行きたくなくなったりする	三次	78	>	57
19. 担任や部活動の先生に対して不満がある	二次	56	>	40
20. 自分の家庭のことで心配や悩みがある	二次	53	>	35
進路面				
21. 自分の能力, 長所, 適正を知りたい	一次	38		38
22. 将来の自分の職業, 自分の生き方, 進路に助言が欲しい	一次	58		56
23. 自分の進学や就職先の選択についてもっと情報が欲しい	一次	42	<	54
24. 進学や就職のための勉強や準備にやる気が起きない	二次	40		47
25. 進路選択において, 自分の希望が親や先生の意見と一致しない	二次	44		46
26. 友人関係を気にして, どんな進路にするか考えてしまう	三次	48		40
27. 多くの欠席, 校則違反などをしたことで進路について不安がある	三次	49		45
28. 自分の内申書にどんな内容のことが書かれているか気になる	二次	31	<	47

* 割合に10%以上差がある場合に不等号記号を記入した

表5 学校にSCが必要かどうか

	人数	%
まったく必要だと思わない	6	3.8
あまり必要だと思わない	7	4.4
どちらともいえない	23	14.4
少し必要	75	46.9
とても必要	49	30.6
合計	160	100.0

表6 悩んだ経験についての項目の係数

	項目数	係数
悩み全体	28	0.884
学習面	9	0.701
心理・社会面	11	0.831
進路面	8	0.715
一次的な問題	8	0.762
二次的な問題	14	0.783
三次的な問題	6	0.664

表7 SCの必要性についての項目の係数

	項目数	係数
悩み全体	28	0.940
学習面	9	0.830
心理・社会面	11	0.917
進路面	8	0.834
一次的な問題	8	0.821
二次的な問題	14	0.894
三次的な問題	6	0.780

5. 自由来室活動の場の利用回数と悩んだ経験の関連

自由来室活動の場を利用した回数によって、悩んだ経験に差があるかどうかを調べるため分散分析を行った。この際、各群の生徒数にばらつきができるだけ生じないように、利用したことがない群、1～5回の利用群、6回以上の利用群の3群に分け、悩んだ体験の得点について一要因の分散分析を行った。結果は、表8のとおりで、有意差は得られなかった。自由来室活動の場を利用した回数と悩んだ経験には関連がないと言える。

このことは、自由来室活動の場を利用する生徒も、利用しない生徒も悩んだ体験では差はないことを示している。つまり、自由来室活動の場は、悩んだ体験のある生徒も、ない生徒も利用すると言える。元気な生徒ばかりが利用して悩みを持った生徒は利用しないのではないかといった懸念を教職員が抱きがちであるが、その懸念は必ずしも当てはまらなかったと言える。

悩んだ体験のある生徒もない生徒も自由来室活動の場を利用することからは、全ての生徒を援助対象と考える一次的援助サービスや、一部の生徒を援助対象とする二次的援助サービスを提供する基盤として、自由来室活動の有効性が期待できる。

そして、この結果を生徒への広報活動に活用することは、生徒のさらなる来室を促すのではないかと期待できる。相談室やSCを悩みがある人のものだと認識することは、「相談するほどの悩みではない」とか、「たいした問題ではない」といった抵抗感につながりやすい。悩みの体験がある生徒もない生徒も、自由来室活動に訪れているという事実は、相談室来室への抵抗を減少させるのではないかと期待できる。

表8 自由来室活動の場を利用した回数別の悩んだ経験の平均と分散分析結果

	なし n = 51	1～5回 n = 63	6回以上 n = 46	F	多重比較
悩み全体	2.30 (0.48)	2.24 (0.48)	2.41 (0.41)	1.76ns	
学習面	2.52 (0.49)	2.52 (0.57)	2.73 (0.45)	2.85ns	
心理・社会面	2.13 (0.59)	1.98 (0.59)	2.13 (0.52)	1.38ns	
進路面	2.30 (0.59)	2.29 (0.56)	2.43 (0.50)	1.00ns	
一次的な問題	2.60 (0.55)	2.54 (0.61)	2.65 (0.62)	0.49ns	
二次的な問題	2.24 (0.49)	2.18 (0.49)	2.39 (0.43)	2.52ns	
三次的な問題	2.06 (0.60)	1.98 (0.59)	2.13 (0.49)	1.02ns	

( )内は標準偏差 **p<0.01 *p<0.05 ns有意差なし

ただし、ここで調査した悩みの体験は、生徒自身の自己報告によるものである。そのため、様々なストレスにさらされていても、悩みとして意識化していない場合には、悩んだ体験がないとして評定されていると考えられる。来室回数とストレス反応尺度などとの関連について調査を行えば、また異なる結果が得られるかもしれない。

6. 自由来室活動の場の利用回数とSCの必要性の関連

自由来室活動の場の利用回数によって、SCへのニーズに差があるかどうかを調べるため分散分析を行った。利用したことがない群、1～5回の利用群、6回以上の利用群の3群にわけ、SCの必要性の得点について一要因の分散分析を行った。結果は、表9のとおりであった。

必要性全体では有意差が得られた。多重比較の結果、自由来室活動の場を1回以上利用したことがある者は、利用したことがない者に比べて、SCに対するニーズを強く感じていると言える。

ニーズの領域による分類では、学習面のニーズについては、有意差は得られなかった。つまり、自由来室の場の利用回数とSCに対する学習面のニーズには関連がないと言える。心理・社会面のニーズでは、有意差が得られた。多重比較の結果、自由来室活動の場を1回以上利用したことがある者は、利用したことのな

い者に比べて、SCに対する心理・社会面のニーズを強く感じていると言える。進路面のニーズでは、有意差が得られた。多重比較の結果、自由来室活動の場を6回以上利用したことがある者は、利用したことがない者に比べて、進路面のニーズを強く感じていると言える。SCは学習面の問題に関しては、教員の専門領域へ立ち入ることを避け、生徒への関わりを控えていた。そのためもあって、学習面のニーズについては、有意差が得られなかったのかもしれない。反対に、心理・社会面、進路面に関しては、自由来室活動において、ある程度はSCの立場を活かしたかわりを持つことができた。そのことが背景となり、自由来室活動の場を利用したことがある者がSCへのニーズを強く感じたのかもしれない。以上のことから、SCへのニーズは、あらかじめ生徒の中にあるものではなく、生徒とSCのかかわりの中から生じてくるものであると示唆される。このことは、SCが生徒の日常生活の中で、生徒からテストされるという石隈（1999）の指摘と一致すると言える。

ニーズの程度による分類では、一次的な問題へのニーズについては有意差が得られなかった。つまり、自由来室活動の利用とSCに対する一次的ニーズの強さには関連がないと言える。二次的な問題のニーズでは、有意差が得られた。多重比較の結果、自由来室活動の場を1回以上利用したことがある者は、利用したこと

表9 自由来室活動の場を利用した回数別のSCの必要性の平均と分散分析結果

	なし n = 51	1～5回 n = 63	6回以上 n = 46	F	多重比較
必要性全体	3.04 (0.91)	3.37 (0.74)	3.58 (0.63)	6.01**	なし < 1～5回* なし < 6回以上**
学習面	2.95 (0.96)	3.19 (0.76)	3.29 (0.74)	2.18ns	
心理・社会面	3.22 (1.07)	3.67 (0.92)	3.91 (0.79)	6.86**	なし < 1～5回* なし < 6回以上**
進路面	2.90 (0.97)	3.18 (0.85)	3.46 (0.67)	5.12**	なし < 6回以上**
一次的な問題	3.02 (0.94)	3.14 (0.84)	3.36 (0.67)	1.58ns	
二次的な問題	3.02 (0.95)	3.43 (0.77)	3.65 (0.68)	7.48**	なし < 1～5回** なし < 6回以上**
三次的な問題	3.10 (1.00)	3.55 (0.87)	3.71 (0.76)	6.21**	なし < 1～5回** なし < 6回以上**

( )内は標準偏差 **p<0.01 *p<0.05 ns有意差なし

のない者に比べて、SCに対する二次的ニーズを強く感じていると言える。三次的な問題のニーズでは、有意差が得られた。多重比較の結果、自由来室活動の場を1回以上利用したことがある者は、利用したことのない者に比べて、SCに対する三次的ニーズを強く感じていると言える。これらより、ニーズの程度がより大きい問題に関しては、自由来室活動の場を利用したことのある生徒は、そうでない生徒よりもSCの必要性を強く感じていると言える。

自由来室活動では、生徒から語られた悩みや問題は、一次的・二次的な問題に該当するものであった。生徒は、ニーズの程度がより小さい問題についてSCに話すことで、ニーズの程度がより大きい問題に関して、SCの必要性を判断しているのかもしれない。このことから、三次的な問題に直面した段階でSCが生徒に関わりを持ち援助を開始するよりは、事前に自由来室活動の場で関わりを持っておくことができれば、より無理なく援助を開始できると考えられる。この点からも、自由来室活動などの日常的な場で多くの生徒に関わりを持っておくことの重要性が指摘できる。

7. まとめと今後の課題

石隈(1999)との比較および、自由来室活動の場を利用した回数による分析から、生徒が持つSCへのニーズは、生徒の中にあらかじめ存在するのではなく、SCと生徒との関係の中で生じてくるものであることが示唆された。本研究の対象となったSCは、生徒へ発行した便りのテーマや、自由来室活動での生徒へのかかわりにおいて、心理・社会面での活動に積極的であったと言える。そのことが、生徒のニーズに反映されていたと思われる。反対に、教室に出向き学習面に関してサイコエデュケーションを行ったり、生徒向けの便りで学習心理学のテーマを取り上げたりすれば、学習面でのSCへのニーズがより高く評価されたかもしれない。

また、本研究の対象となったSCの実際は、生徒のニーズに幅広く応える「理想的なスクールカウンセラー」ではなかった。しかし、それにもかかわらず、A中学校の2年生はSCの必要性を非常に高く評価していた。一般に、SCは非常に幅広い活動を期待されているが、時間の制約や立場の不明確さによる現実的な制約も非常に大きい。しかし、本研究の結果は、学校

の実情やSC個人の持ち味にあわせて無理なく活動していくことが重要であると示唆している。

本研究は、1事例のSCを扱ったものであるため、SCの活動が、生徒のSCへのニーズにどのように反映されるかを詳細に論ずることはできない。多くの実践事例を蓄積し、生徒のニーズを比較検討することが重要であろう。

引用文献

- 半田一郎 1996 公立中学校での学校カウンセラーとしての体験 こころの健康, 11, 18-23 .
- 半田一郎 2000 学校における開かれたグループによる援助 - 自由来室活動による子どもへの直接的援助 - カウンセリング研究, 33, 265-275 .
- 半田一郎 2004 学校心理士によるカウンセリングの方法 学会連合資格「学校心理士」資格認定運営機構企画・監修 講座学校心理士 - 理論と実践 2 学校心理士による心理教育的援助サービス 北大路書房 Pp.152-163 .
- 石隈利紀 1999 学校心理学 - 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 木南千枝 1998 “遊び部屋”から見えてくるもの 倉光修編 臨床心理士のスクールカウンセリング - 2 - その活動とネットワーク 誠信書房 Pp.94-102 .
- 高岡文字 2002 思春期の子どもたちへの接近 - 「日常開放的空間モデル」のスクールカウンセリング活動の展開 - 近藤邦夫・志水宏吉編 学校臨床学への招待 - 教育現場への臨床的アプローチ 嵯峨野書院 Pp.167-184 .
- 玉瀬耕治 2003 最近の研究動向 - 臨床 日本教育心理学会編 教育心理学ハンドブック 有斐閣 Pp.111-117 .

Second Year Junior High School Students' Needs for School Counseling

Ichiro HANDA

(School Counselor of the Ibaraki Prefecture)

The purpose of this study was to investigate the needs junior high school students have for school counselors (SC). A questionnaire about the needs for SC was administered to 160 second grade students at a junior high school. The evaluated SC opened his counseling room to all students and has talked with many students about their daily concerns. Seventy-seven percent of the students responded that SC was necessary for schools. Although the SC was not an ideal SC who can respond to all students' needs, he received an affirmative evaluation from students.

Key words: school counselor, junior high school, needs

(2003年9月12日受稿; 2005年5月25日受理)